

群 教 セ	F08 - 01
	平 30.269 集
	生徒指導

互いを認め合い、 自信をもって活動することができる児童の育成

—自信の高まりを実感するための、「心の温度計」の活用と
「だんだんタイム」を取り入れた学級活動を通して—

特別研修員 茂木 友香里

I 研究テーマ設定の理由

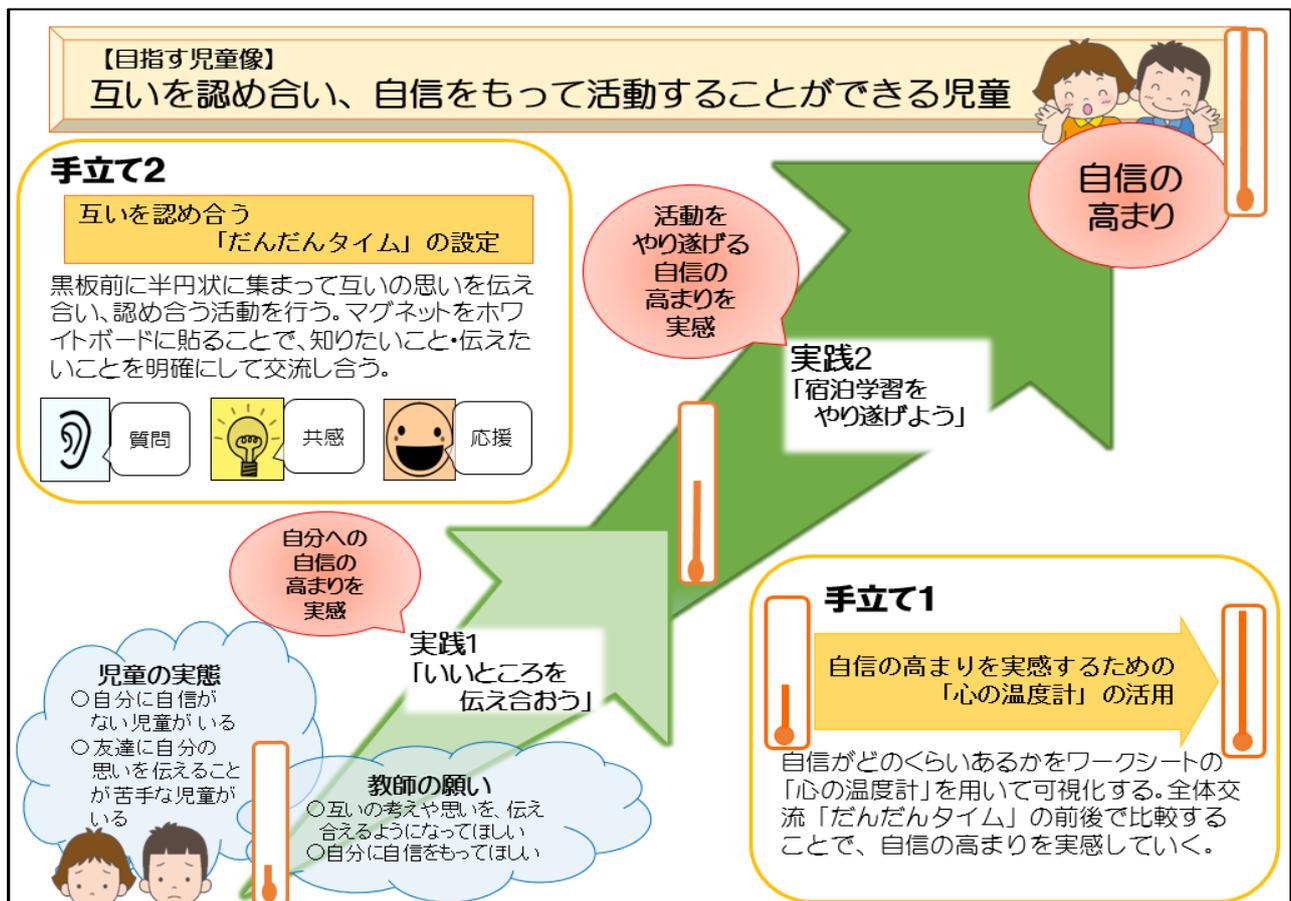
「生徒指導提要」（平成22年3月）の「特別活動における生徒指導」に、「好ましい人間関係が醸成されている集団においては、一人一人の児童生徒が自ら設定した目標実現に取り組んだり（中略）自己の生活の向上を目指して努力します」と示されている。学級において、互いの思いや考えを伝え合って理解し、認め合うことは、好ましい人間関係を築いていく重要な要素であると言える。

本学級の児童は10名と少人数であり、限られた人間関係の中で過ごしている。4月に行ったC&S質問紙調査の結果から、「相手に言いたいことが言えない」児童が2名、「自分が嫌になることがよくある」児童が2名いることが分かった。これらは、自分に自信がもてないことや相手に認められる経験が少ないことなどが原因と考えられる。

そこで、互いを認め合う活動を積み重ね、好ましい人間関係を築いていく必要があると考えた。そうすることで、児童は周囲に認められたうれしさから自分に自信をもち、新たなことに挑戦したり、様々な活動に取り組んだりすることができるようになることを考え、上記のとおりテーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

本学級には、自分に自信がもてない児童や、自分の思いを伝えたり、相手の思いを聞いたりすることに課題が見られる児童がいる。そのため、互いを認め合い、自信をもって様々な活動に取り組んでいけるようにしたいと考え、以下のような二つの手立てを講じた。

手立て1 自信の高まりを実感するための「心の温度計」の活用

自信は、自己の内面に存在するため、どのくらいあるかを実感したり客観的に捉えたりすることは難しい。そこで、「心の温度計」というツールにより、自信の高まりを実感できるようにすることを考えた。実践1では、事前の活動において、自分をどのくらい好きか（自分に対する自信）を、実践2では、初めての活動をやり遂げる自信がどのくらいあるかを「心の温度計」に色を塗ることで可視化できるようにする。また、どうしてそのように塗ったか理由も明らかにすることで、自分自身を知るきっかけにできるようにする。

授業の終末（手立て2「だんだんタイム」を終えた後）で再び「心の温度計」を用い、自信の高まりを可視化する。このようにして授業前と比較することで自信の高まりを実感することができる。と考える。

手立て2 互いを認め合う「だんだんタイム」の設定

黒板前に全児童が半円状に集まり話し合う。各々のホワイトボード（A4サイズのもの）にマグネット（質問・共感・応援）を貼り、話題をはっきりさせて互いの思いを伝え合う。児童はマグネットを使うことで質問したい、伝えたいという意思を示すことができる。また、各自のマグネットを貼ることで全員に発言の機会を確保することができる。

「だんだんタイム」では、「友達の話最後まで聞くこと」「話を聞いて相槌を打つなどの反応をすること」を約束として交流する。思いを伝え合う中で、児童は質問したり共感したり、応援したりして、互いを認め合うことができる関係を築いていくことができると考える。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 「心の温度計」による自信の可視化と、互いを認め合う「だんだんタイム」前後の比較により、全ての児童が自分に対する自信や活動をやり遂げる自信の高まりを実感していた。高まった理由には、「みんながいいところを見つけてくれて自分が大きくなりました」や「みんながおうえんしてくれたから、いっぱいやる気がでたからです」などが見られた。
- 互いを認め合う「だんだんタイム」において、温かい雰囲気の中、どの児童も笑顔で関わり合う姿が見られた。参観者から「だんだんタイムでの話合いで自分のことを応援したりほめてもらったりしたことで、笑顔でいっぱいになり自信を高めていた」という感想が寄せられた。これは、友達に認めてもらったり友達を応援できたりしたことで、自分に自信をもつことができた姿の表れだと考える。

2 課題

- 「だんだんタイム」で互いを認め合う際、思い込みや不確かな理由とともに応援の言葉を伝えたため、友達を励ましたいという思いが伝わりにくくなってしまった児童がいた。相手にわかりやすい理由を伝えられるよう、学校生活の様子などを根拠として互いのよさを伝え合う活動を今後も積み重ねていきたい。また、日常生活の中で児童の行動や発言を他の児童に広げることで、友達の様々なよさに気づき、互いを認め合う気持ちをさらに共有していけるようにしていく必要がある。
- 終末の「心の温度計」を見ると、すべての児童が自信の高まりを感じている結果となった。児童の自信がさらに高まるように、「だんだんタイム」を取り入れた活動を学校生活における様々な場面でも積み重ねていきたい。また、初めての活動に対しては、実際に経験していくことで徐々に自信が高まっていく。そこで、経験を通してやり遂げたという自信につながるような活動後の振り返りを充実させていく必要がある。

実践例

1 題材名 「宿泊学習〈妙義の宿〉をやり遂げよう」（第3学年・2学期）

2 本題材について

本校では、毎年、3年生から6年生までの児童で4泊5日の宿泊学習〈妙義の宿〉を実施している。親元を離れて異学年の児童と集団で生活するということは、児童にとって楽しみである反面、初めてということもあり不安も大きい。特に、保護者の手を借りずに「起床」「食事」「入浴」「就寝」などの生活を5日間行うことは、3年生にとって難しい面がある。学校生活を見ている、時間を守って行動することや身支度を整えることなどに課題が見られる児童もいる。したがって、初めての〈妙義の宿〉に対して不安を抱いている児童が、同じ立場である学級の友達と共に前向きに努力しようとするのは、自信をもって活動していくために大きな価値がある。そして、児童一人一人の大きな成長も期待できる。また、自分に自信のない児童は初めてのことに對して不安を感じる気持ちが強いので、前向きに取り組もうという気持ちをより高めていく必要がある。そこで、みんなで〈妙義の宿〉をやり遂げるために考えた各自のめあてを伝え合い、友達と認め合ったり励まし合ったりすることで初めての活動をやり遂げる自信を高めることができると考えた。児童は、友達が自分の思いを聞き、共感し応援してくれることで、自分が周囲に認められていると感ずることが出来る。また、友達のよさを伝え、励ますことで、友達を認めることができた自分を肯定的に捉えることができる。そして、児童は自分に自信をもち、互いを認め合える仲間と共に初めてのことに挑戦していこうとすることができると考える。

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想し、実践した。

目標	〈妙義の宿〉をみんなでやり遂げるために、自分のめあてを考えて伝えたり、互いを励まし認め合ったりすることができる。	
評価 規 準	集団活動や生活への 関心・意欲・態度	各自が考えためあてを伝え、認め合い、初めての〈妙義の宿〉をやり遂げようという意欲をもって取り組んでいる。
	集団の一員としての 思考・判断・実践	初めての〈妙義の宿〉をやり遂げる自信をもつために、互いの思いを伝え、認め合っている。
	集団活動や生活に ついての知識・理解	各自が考えためあてを伝え、認め合う中で、〈妙義の宿〉をやり遂げるために互いを応援したり協力したりすることが大切であることを理解している。
時間	主な内容	主な学習活動
事前の 活動	問題の発見	・初めての〈妙義の宿〉について目的や内容、役割分担などについてしおりや映像などから学習する。
	問題の意識化	・〈妙義の宿〉をみんなでやり遂げることの大切さについて話し合う。 ・〈妙義の宿〉をやり遂げる自信を、「心の温度計」に表す。 ・〈妙義の宿〉をやり遂げるための自分のめあて(よさや得意を生かしたこと、苦手だけれど挑戦したいこと)を考える。
本時の 活動	出し合う 比べる 認め合う	・〈妙義の宿〉をみんなでやり遂げる自信を「心の温度計」に表したものを確認する。 ・自分の考えためあてを伝え合う。 ・「だんだんタイム」の中で、めあてについて質問や応援の気持ちを伝え、互いの思いを認め合う。 ・〈妙義の宿〉への自信を「心の温度計」を用いて表し、高まりを実感する。
	実践と 振り返り	・4泊5日の〈妙義の宿〉期間中、自分の考えためあてを達成できたかどうか、振り返りを毎日行う。 ・〈妙義の宿〉で互いに頑張ったことを「だんだんタイム」で伝え合う。 ・〈妙義の宿〉を終え、次学年で〈妙義の宿〉をみんなでやり遂げる自信を「心の温度計」を用いて表し、高まりを実感する。

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は、初めての宿泊学習<妙義の宿>をみんなでやり遂げるために、各自が考えた自分のめあてを伝え合い、互いを認め合うことをねらいとしている。1学期に行った「互いのよいところを伝え合う」活動や、毎日帰りの会で行っている「今日のスター」（友達のよさを見付け伝える）で培ってきた互いのよさを見付け、認め合う気持ちを生かすよい機会となるようにした。互いを認め合う活動を通して自信をもち、初めての活動に挑戦しようという思いがもてるようにと考え、主に二つの手立てを講じた。

手立て1 活動をやり遂げる自信の高まりを実感するための「心の温度計」の活用

事前の活動において、初めての<妙義の宿>をみんなでやり遂げる自信を、「心の温度計」を用いて可視化できるワークシートを準備した。そして、授業の終末（手立て2「だんだんタイム」を終えた後）で、再び「心の温度計」を用いて可視化できるようにし、前後で比較することで活動をやり遂げる自信の高まりを実感できるようにした。

手立て2 活動をやり遂げる自信をもつために、互いを応援し認め合う「だんだんタイム」の設定

<妙義の宿>に対して各自が考えためあてをホワイトボードに貼り、マグネット（質問・応援）を活用して全体で交流し合う「だんだんタイム」を設定した。その中で、めあてを考えた理由について質問したり、めあて達成に向けてがんばろうとしている友達に励ましの言葉を伝えたりするなどの思いを伝え合う中で、互いを認め合うことができるようにした。

4 授業の実際

(1) 事前の活動

事前の学習において、初めての<妙義の宿>をみんなでやり遂げるための学級の合言葉「みんなで」を確かめ、児童は自分のめあてを考えた。その際、自分のよさや得意なことを生かしためあてと苦手だけれど挑戦したいめあての二つを考えた。これは、自分の長所と短所に目を向け、長所はさらに伸ばし、短所は改善していこうという意識をもつためである。次に、<妙義の宿>をやり遂げる自信を「心の温度計」で可視化できるようにした。初めての活動ということもあり、自信がほとんどない児童や、自信があっても半分くらいという児童が多かった（図1）。ワークシートの吹き出しに書かれた理由からも、初めての活動に対する児童の不安が見られた。

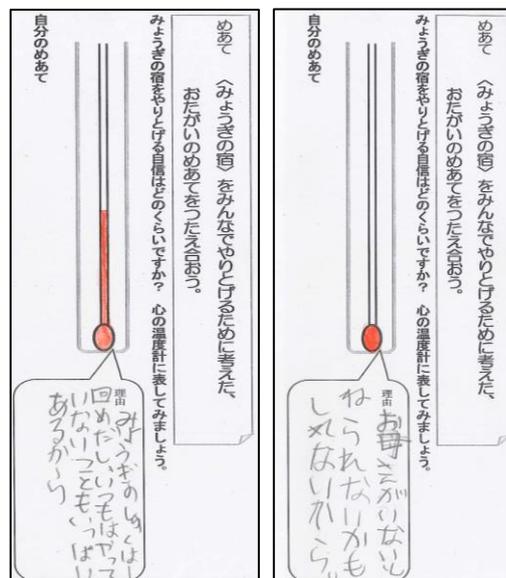


図1 心の温度計で表した自信と理由

(2) 本時の活動

① 「心の温度計」から、活動をやり遂げる自信を振り返る

事前の活動で記入した、活動をみんなでやり遂げる自信を、「心の温度計」を見て思い出せるようにした。「だんだんタイム」後に、再び「心の温度計」に自信を表すことを話し、活動の見通しがもてるようにした。

② 互いを認め合う「だんだんタイム」

児童は、考えためあてをホワイトボードに貼り、各々について「教えて」（理由を知りたい）「ファイト」（応援してるよ）などの質問や応援を伝え合った（図2）。交流の中で、「〇〇くんは休み時間も元気に体を動かしているから登山もきっとできるよ」や「私も朝起きるのは苦手だから一緒に頑張ろう」など、応援する様子が見られた。児童は自分の思いを分かってもらったうれしさを感じ、互いを認め合う気持ちを高めていった。また話題に上がった児童のめあてを実物投影机で映し、マグネット（図3）を活用して交流することで、伝えたいことを明確にした全員でのやり取りができ、笑顔溢れた活動となった。



図2 だんだんタイムの様子



図3 マグネットの活用

③ 活動をやり遂げる自信を「心の温度計」を用いて可視化し、自信の高まりを実感する

終末に、本時の活動を通して「妙義の宿」をやり遂げる自信の高まりを「心の温度計」に表し、授業前と比較できるようにした。児童によって自信の高まりに差はあったが、全員の「心の温度計」が高まっていた。理由を見ると「いろいろな友達からだんだんタイムでおうえんを言われたので、がんばりたいと思ったからです」などとあり、互いを認め合う「だんだんタイム」を通して、自分を肯定的に捉えることができたことがわかる。

「妙義の宿」への意気込みからも、初めてのことに頑張っていこうという意欲が感じられる記述が多く見られた（図4）。

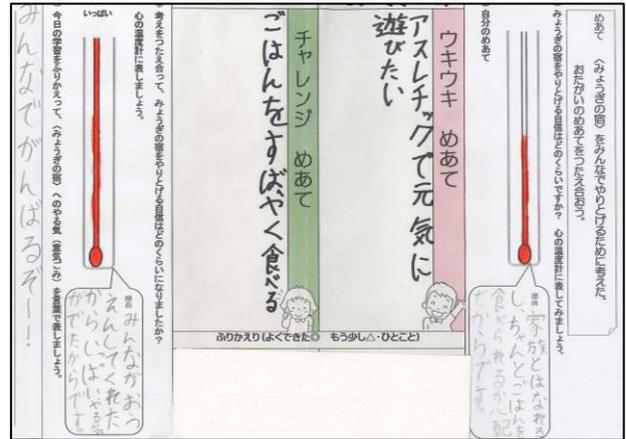


図4 自信の高まった様子

(3) 事後の活動

① 宿泊学習「妙義の宿」

4泊5日の「妙義の宿」を全員が元気にやり遂げることができた（図5）。全ての活動が初めてということもあり、どのように行動すべきか分からず困っている児童もいたが、上級生に聞き、友達と協力して取り組んでいた。早寝早起きをめあてにしていた児童が、毎日起きる姿や、毎日歩くのを頑張りたいとめあてに挙げていた児童が、一生懸命歩く姿も見られた。そして最終日には、「もう1日泊まりたい」という声も聞かれ、充実した宿泊学習を行うことができたことが分かった。



図5 「妙義の宿」登山の様子

② 振り返り

自分のめあてに対する振り返りを毎日行った。その結果、自分のよさや得意なことを生かしためあてと苦手だけれど挑戦したいめあての両方について「よくできた」とほとんどの児童が答えていた。中には、めあてを達成できない日があった児童もいたが、最終日には「できるようになった」と答えていた。また、事後に「妙義の宿」期間中に見つけた友達のよさを伝え合う活動を行い、「妙義の宿」をやり遂げた後、次学年に向けて「妙義の宿」をやり遂げる自信を「心の温度計」を用いて可視化できるようにした。その結果、児童全員の「心の温度計」が上昇していた。8名の児童の「心の温度計」は、ほぼ一番上まで上昇していた。残り2名も「次は4年生としてがんばりたい」と理由を書きしており、さらに次の活動に対しても意欲的に取り組もうとしていることが分かった。

5 考察

今回の実践で、初めての行事に対して不安はありながらも、どの児童も最後までやり遂げることができた。学年当初笑顔が少なく、いつも小さな声で話していた児童が、宿泊学習をやり遂げた後、自分から友達に声をかけられるようになり、笑顔で他の活動にも取り組めるようになった点は、大きな変化である。活動後に実施したC&S質問紙調査の結果を前回と比較すると、以前、「相手に言いたいことが言えない」と答えた2名の児童は、言いたいことが「少し言える」と答えていた。また、「自分が嫌になることがよくある」と答えた2名の児童は、自分が嫌になることは「あまりない」という答えに変化していた。これらは、互いを認め合う活動を繰り返してきたことや、「妙義の宿」をやり遂げたことによって自信が高まってきた表れだと考える。以上のことから、「だんだんタイム」で互いを認め合い、「心の温度計」を用いて自信の高まりを実感できるようにしたことは、自信をもって活動していくために有効であったと考える。

児童がさらに自信の高まりを実感できるようにしていくためには、友達を応援する時に、相手の日常の姿から根拠を見だし、理由を伝えられるように工夫していく必要がある。そうすることで、思いを共有し互いを認め合う気持ちを更にもつことができると考える。今後も互いを認め、励まし合えるような「だんだんタイム」を継続し、自信の高まりを実感できるようにしていきたい。